

序にかえて——佐竹一族の中世——

高橋 修

佐竹氏の歴史は、河内源氏の庶子・義光が北関東に利権をつかみ、その孫・昌義が常陸国久慈郡佐竹郷に土着して本領を形成したことに始まる。治承・寿永の内乱期には源頼朝と戦い、奥州合戦に際し、ようやく鎌倉幕府体制下に入るが、奥七郡の多くの所領を失うことになった。一御家人として雌伏を余儀なくされたが、鎌倉末から南北朝期の内乱においては、いち早く足利方について戦い、常陸守護職を獲得し飛躍のきっかけをつかんでいる。

その後、一〇〇年にわたる一族内紛・佐竹の乱を克服し部垂の乱を収めることによつて、地域権力として自立を遂げ周辺領主を従え版図を拡大する。戦国時代には、合戦と和睦、抗争と連携を繰り返し、南奥や常陸南部・下野東部などにも勢力圏を拡大し、やがて織豊政権と向き合うことになった。

小田原を攻める豊臣秀吉のもとに参向することで豊臣大名となり、南奥への進出はあきらめざるをえなくなるものの、公儀権力を後ろ盾として常陸国内およびその周辺を領国化することに成功する。ところが関ヶ原の戦いでは旗職を明らかにすることができず、戦後、秋田に転封を命じられ、常陸の武家領主としての歴史に幕を閉じることとなった。

本書は、こうした常陸留住から秋田転封に至る佐竹氏五〇〇年の歴史の中から、歴史学的に深めるべき論点を見出

し、考察した論稿を集成したものである。

佐竹氏に関する学説史の詳細については各論文に譲るが、五〇〇年という時代幅で、佐竹氏の足跡や事件を実証的に復元し、武士団としての構造に切り込んだ研究は、これまでみられない。自治体史における地域別の通史叙述や江原忠昭『中世東国大名常陸国佐竹氏』（私家版、一九七〇年）のような概説書はあるものの、これらは、史料から検討することが必要なそれぞれの事績や事件に本格的な分析を加えたものではない。古典といふべき福島正義『佐竹義重』（人物往来社、一九六六年）や、最新の研究成果が盛り込まれた佐々木倫朗『戦国期権力佐竹氏の研究』（思文閣出版、二〇一一年）等も出版されているが、これらは、もちろん対象や時代を限定した個人研究の成果である。やはり中世五〇〇年の歴史を総体的に対象として、研究者がそれぞれの立場から課題を掴み出し、研究史の現状に照らして分析を加え、佐竹氏存在について地域史的に議論するための土台となるような問題提起的な研究の集成が、いま必要だろう。本書は、そうした問題意識の上に編まれたものである。

*

本書に収めた各論稿は、おおむね時代順に配列しているが、必ずしも通史や概論を目的とするものではない。各論文とも、冒頭には概説的な説明を加えているが、各章は、あくまで佐竹氏の足跡の中から、深めるべき論点を取り上げ、考察した個別論文であることをまずお断りしておく。

1・2では、平安後期における佐竹氏の成立過程を論じている。

まず1は、祖と仰がれる新羅三郎義光の政治的立場の解明から、義光とその子孫が北関東、常陸に定着することになる経緯を説明し、佐竹氏成立に至る権力形成過程を段階的に説明した。2では、治承・寿永の内乱期、従来「金砂

合戦」と呼ばれてきた頼朝との戦闘を、新たに「常陸奥郡十年戦争」という枠組みで把握することにより、平安後期を通じて形成された佐竹氏の勢力基盤の規模や実態をうかがう。

3～5は、鎌倉期の雌伏の後、南北朝の内乱での軍事活動や、室町・戦国期の一族紛争における佐竹氏の対応を分析し、佐竹氏が地域権力として自立する過程を追究する論考を収めた。

3は、東国における南北朝内乱緒戦となった瓜連合戦の意義を佐竹氏「旧領」回復の、北畠親房の下向による小田城での戦闘を佐竹氏南進の、それぞれ重要画期と位置づけ実証的に復元し、そこに観応の擾乱における佐竹宗家分裂の端緒を見出している。

佐竹の乱(山入の乱)を取り上げる4は、一族間の抗争が、一貫して室町幕府と鎌倉公方との対立構図の中で展開したことに注目し、山入氏が籠った小栗城をめぐる戦闘の意義を強調する。続いて本宗家内部に起こった五郎・六郎合戦にも、古河公方成氏派と幕府・上杉派の対立関係が反映されており、それが享徳の乱とも接続することを論じている。

5は、部垂の乱の意義を再考した論稿である。佐竹の乱の克服過程には顕著であつた近隣領主・岩城氏の影響力を排除して解決された部垂の乱を、佐竹氏が地域権力として自立する画期ととらえ、義篤の右馬権頭就任を、その中央における承認として重視している。

6～10には、戦国期に、戦国大名(戦国領主)としての実質を築く過程における佐竹氏と周辺領主や一族・家臣との関係について考察した成果を収めた。

6は、佐竹氏と所領を接する近隣の領主、江戸氏・小野崎氏との関係を主題とする。佐竹氏の権力機構の中枢に位置していた江戸・小野崎両氏は、佐竹の乱の過程で独自の「領」を形成して自立、佐竹氏は江戸氏に「一家同位」の

家格を付与し、「洞」の外縁部に位置付け直したものと論じる。

7は、常陸南部に伝統的な勢力を確立する常陸平氏の諸氏との関係を再考する。大掾氏や真壁氏等は「洞」に包摂されたと考えるよりも、非常時にのみ佐竹氏の指揮下に入る「味方中」と把握すべきことを提言する。

8は、下野那須氏との関係を考察する。永正期、佐竹氏が下那須氏を支援したことにより上那須氏が滅亡に追い込まれたこと、天文期には、佐竹氏の介入に対する上那須地域の諸氏の反発が「那須洞念劇」と呼ばれる内紛をまねき、それが下野北部を領する地域権力としての那須氏の自立を促す結果になったことなどを論じている。

9は、佐竹氏の南奥進出過程について復元し、その意義についての再評価を試みる。義舜・義篤期に依上保の支配を実現したことを機に、佐竹氏は北進政策を本格化し、義昭・義重期には白川氏を従えることに成功して南奥領主連合を成立させるが、伊達氏の南進策と衝突して、この領主連合は崩壊、政策は挫折するに至る。こうした一連の経緯を復元した。

10は、「洞」という言葉に象徴される佐竹氏の権力構造について論じる。戦国期、佐竹氏の配下に入った領主たちは自立的な存在であり、佐竹三家は、彼等を佐竹宗家のもとに繋ぎ留める役割を果たし、当主の傍らには執行部ともいうべき宿老・奉行人が組織されていたことを明らかにする。

11～13は、戦国末期・織豊期の、上杉氏・後北条氏との連携・抗争、織田・豊臣政権への対応、および江戸初期の秋田移封に関する論稿である。

11は、上杉謙信の越山を導いた佐竹氏が、越相同盟の成立・破綻を経て「東方之衆」の盟主となり小川台合戦で北条氏と戦うまでの過程、および織田信長政権の関東支配崩壊後、反北条氏連合の盟主として沼尻合戦を戦うに至る経緯を復元する。

関ヶ原合戦について分析した12は、佐竹氏のあいまいな去就について、豊臣大名となり政権の影響を強く受けた佐竹氏が、それゆえに統一した意思を形成できなかったことに起因するものと説明する。

13は、江戸幕府のもとで秋田移封を命じられ混乱する佐竹氏と家臣の対応、および後世、移封に従ったことが家臣の家において由緒化する現象について論じる。

*

取り上げる事件・事象の重複はできる限り避けたが、各章は、あくまで独立の論文であり、個々の歴史的事象のとなえ方や事件の評価については、当然のことながら、執筆者の立場を尊重している。自治体史等とは異なり、調整やすり合わせによる認識の統一を図ることはしていない。

例えば「常陸奥郡十年戦争」というとらえ方は本書において初めて提起される概念であり、執筆者の共通理解ではない。また戦国期の佐竹氏とそれに従う領主との関係も、「洞」と表現されるような領主連合の時代的変遷や、この概念で、どの領主との関係まで把握できるのかといった問題は、執筆者間で認識が異なっている。佐竹氏の権力的特質も、戦国大名と規定するのか、戦国領主と表現すべきか、あるいは地域権力の時代的特性とみなすべきか、執筆者の立場は分かれている。こうした見解の相違こそが、ある意味では佐竹氏について議論すべき課題なのであり、本書刊行の目的をよく表していると思う。この点も、ご理解いただきたい。

ただしそれは、本書の利用者を研究者に限定する意図に基づくものではない。一般市民にもぜひ手に取っていただき、中世常陸に思いをはせ、ぜひとも郷土の歴史を考える教材としていただきたい。そのため本書では、可能な限り平易な叙述を心がけ、史料引用にあたっては、原文を読み下し文に改め、史料本文の漢字もできる限り常用漢字に改

めている。史料の出典は明記しているので、適宜、引用元の史料集などで確認いただきたい。

また各章で取り上げた事象や事件について、現地に即して実感していただくために、各章の後にはコラムを設けた。ここでは実物資料や遺跡・旧跡に即して、佐竹氏にかかわるトピックスを取り上げている。短い文章の中に最新の研究・調査成果が盛り込まれており、各章本文と合わせて味読していただきたい。巻末には、各章およびコラムで依拠した参考文献を一括して掲載した。「佐竹氏関係文献一覧」としても活用していただきたい。

目次

序にかえて―佐竹一族の中世―	高橋修	1
1 新羅三郎義光と佐竹氏の成立	高橋修	10
●コラム 佐竹氏本領の景観―馬坂城、佐竹寺、正宗寺―	高橋修	24
2 常陸奥郡十年戦争	高橋修	28
●コラム 金砂山と山麓の仏教文化―藍原怜	40	
3 南北朝の動乱と佐竹氏	寺崎理香	44
●コラム 中世都市・瓜連と瓜連合戦―高橋修	60	
4 東国の戦乱と「佐竹の乱」	山川千博	64
●コラム 山入城跡・武生城跡・久米城跡―額賀大輔	84	
5 部垂の乱と佐竹氏の自立	山縣創明	88
●コラム 部垂城跡と部垂の乱の伝説―牡丹健一	102	
6 佐竹氏と江戸氏・小野崎氏	泉田邦彦	106
●コラム 小田城跡・鹿島城跡・府中城跡―額賀大輔	122	

- 7 佐竹氏と常陸平氏……………中根 正人 126
- コラム 伊達政宗の「密書」——「小野崎文書」の発見——藤井達也 140
- 8 佐竹氏と下野の武士……………前川 辰徳 144
- コラム 高部館跡と高部宿——山川千博 156
- 9 戦国期佐竹氏の南奥進出……………森木 悠介 160
- コラム 佐竹氏南奥の城——山川千博 176
- 10 佐竹氏の権力構造と家臣たち……………佐々木 倫朗 180
- コラム 東義久の山方城下構想と五輪塔——高橋裕文 192
- 11 謙信の南征、小田原北条氏との抗争……………佐々木 倫朗 196
- コラム 舞鶴城と佐竹氏ゆかりの社——常陸太田——廣木達也 212
- 12 豊臣政権と佐竹氏——関ヶ原合戦への道……………森木 悠介 216
- コラム 水戸八幡宮と佐竹義宣の兜——金子千秋 232
- 13 秋田移封——つき従った者たち……………平岡 崇 236
- コラム 秋田藩士の故地来訪——『常陸御用日記』——高村恵美 252